

うたとかたりの対人援助学

第11回 「天人女房」と愚かな男たち

鵜野 祐介

「天人女房」とは？

今年(2019年)11月15-17日、アジア民間説話学会第16回国際大会が立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催される。日中韓3カ国の昔話研究者が集う本学会では毎回、特定の主題を決めて研究発表と討論を行ってきたが、今回の主題は「天人女房」である。

日本の「天人女房」の代表的なあらすじを紹介しよう。「男が水浴びをしている天女たちの羽衣の一つを隠すと、一人の天女が昇天できず、男と結婚して子どもを生む。天女の妻は、子どもから教えられて家の中に隠された羽衣を見つける。天女は、瓜の種を残し、瓜の蔓を伝って天まで昇ってくるように、と書き残して天に帰る。夫が天女の妻に言われたとおりにして天に昇って妻の両親に会うが、天人である妻の両親は男のことが婿として気に入らない。妻の両親は男に畑仕事の難題を次々に出すが、男は妻の助言ですべての課題をなしとげる。最後に瓜畑の番をさせられた男は、妻の警告にもかかわらず瓜を縦切りにして食べると、瓜からあふれ出た大水で川の向こうへ流されてしまう。妻が、七日ごとに会おう、というが、男がそれを、七月七日、と聞き違えたために、男とその妻は天の川をはさんで住み、一年に一回しかあうことができなくなる」(稲田浩二『日本昔話ハンドブック』三省堂 2001:147-148)。

中国人女子留学生から見た日本の「天人女房」

今回の大会で発表予定の大阪市立大学大学院生・張宇さんの発表原稿作成の手伝いをさせていただいた。ジェンダー論の立場から日中の昔話の比較研究を行っている張さんは、日本の「天人女房」の特徴を「男性の受動性と愚かさ」ととらえ、その背景に夫や婿に対して受動性や愚かさを求める江戸時代の庶民のジェンダー観があったのではと指摘する。詳細は11月のご発表を待つことにするが、これまでこの話をそのような観点から見ようとしたことがなかった筆者にとって、彼女の指摘は新鮮だった。

言われてみると確かに、男が自分の意志で行動したのは、天女の羽衣を隠すという最初の場面だけで、あとは天女の言うまま、成すがままである。拳句の果てには、天女に言われたタブーを破ったために洪水に見舞われ、逢瀬の期日を聞き間違えて年に一度しか会うことが許されなくなるという、受け身で愚かで情けない男である。

なぜこんな男が主人公であるような話が語り継がれたのだろう。語り手たちがこの話に込めたメッセージとはいったい何か。いくつかの角度からこの謎に迫ってみたい。

日本の異類婚姻譚における愚かな男たち

人間が人間以外の存在、例えば動物や植物の精霊や妖怪など—これを「異類」と呼ぶ—と

結婚する話は「異類婚姻譚」と呼ばれる。日本の異類婚姻譚を眺めてみると、そこに登場する男には、人間であれ異類であれ、愚かなふるまいが目につく。

例えば「鶴女房(鶴の恩返し)」では、「私が機織りをする姿を見てはなりません」と言われたにもかかわらず覗き見して、妻の正体が鶴であることが知れ、立ち去る妻を人間の夫は見送る。あるいは「猿婿入り」では、人間の新嫁に懇願されるまま、餅を入れた臼を背負い、桜の花枝を手折ろうとして枝が折れ、猿の夫は川へ落ちて死ぬ。

この連載の第6回で紹介した「浦島太郎」も、竜宮の乙姫という「異類の女」との婚姻譚と見なすこともできる話だが、ここでも主人公の男は「見るな」のタブーを侵したために年老いてしまうという愚かさを示す。さらには、連載第1回で取り上げた「食わず女房」もまた、独り者の男は「飯を食わない働き者の娘と結婚したい」という愚かな願望を持ち、妻の行動に不審を抱いて覗き見してその正体が蜘蛛や蛇や鬼だと知ったが故に、あやうく殺されそうになる。

「絵姿女房」や「竜宮女房」といった例外を除けば、日本の異類婚姻譚の大多数が結婚生活の破綻つまり夫婦の離別(生別・死別)を結末とするが、異類婚姻譚の夫のほとんどが妻の指図に従う「受け身」の存在であり、離別の原因のほとんどが、人間であれ異類であれ、夫の愚かなふるまいであることはとても興味深い。

笑い話「愚か婿」の豊饒さ

昔話の分類案として国際的に最もよく利用されているアールネ&トンプソン『昔話の話型』(AT)において、昔話は「動物昔話」「本格昔話」「笑い話」「形式話」の4つに大別されている。稲田浩二「日本昔話タイプインデックス」(『日本昔話通観』第28巻所収、略称IT)はATを踏まえ

て、日本の昔話全1211話型を「むかし語り」「動物昔話」「笑い話」「形式話」の4項目に分類し、「笑い話」として598~1180の話型を登録している。そのうち「愚か婿」の話型群が1008~1058の計51話あるのに対して、「愚か嫁」の話型群は1059~1075の計17話と、「愚か婿」の話型数の方が圧倒的に多い。

バラエティに富む「愚か婿」話の中でも代表的な話が「団子婿」だろう。ITでは「1047A 物の名忘れ—団子婿型」と登録されているこの話のあらすじは以下の通り。「婿が嫁の里で団子をよばれ、その名を忘れないように、団子団子と繰り返しながら帰る。道中、どっこいしょ、と溝をとび越え、団子がどっこいしょに変わる。家に着いた婿は、嫁にどっこいしょを作るよう言うが、嫁はなんのことだかわからない。婿が怒って嫁の額を叩くと、嫁は団子のようなこぶができたと言い、婿は団子の名前を思い出す」(前掲、稲田2001:197)。

ちなみに、韓国や中国でもやはり、妻の実家へ行っておいしい料理をふるまわれ、その名前を忘れないように繰り返して帰るが、途中のアクシデントで別の名前に入れ替わってしまう、記憶力のよくない婿の話が伝わっており、「愚か婿」は東アジアに共通する特徴のようである(鶴野『日中韓の昔話 共通話型三〇選』みやび出版2016:264-270)。

伝統的に男尊女卑のジェンダー観が強いと考えられている東アジア諸国において、「愚か婿」の昔話がかくも人気を博している理由は何だろうか？

婿に無理難題を押し付ける舅

但し、日本の「天人女房」において、天上界に昇った婿は確かに妻の天女の援助なしでは何もできない無力な存在だが、それ以上に目を引くのが、婿に無理難題を押し付ける舅の存在

である。例えば、島根県の類話では、①八斗の粟の種籾を八反の畑に蒔(ま)け、②昨日蒔かせた粟を一粒残らず拾って八斗の枵に戻せ、③川向こうにある瓜が植えてある畑の草を取れ、といった課題が出される(前掲鶴野 2016:194-195)。①と②が人間業では不可能な難題であり、妻の天女の超人的な助力によって達成したのに対して、③は草取りでのがつめた婿が瓜を食べようとするを見越して、切った瓜から大水が溢れ出すよう詔(はか)っており、婿はその計略にまんまとはまってしまう。

つまり、硬軟取り混ぜた舅の婿に対する攻撃力が、若夫婦の防御力(愛の力)に勝利したと見なせる。「白雪姫」や「シンデレラ」をはじめとするヨーロッパの伝承メルヒェンと好対照を成す「天人女房」のこの結末には、語り手たちのどんな思いが込められているのだろうか。

江戸期の家族観とジェンダー観

「天人女房」の物語は、不特定の場所や時代を舞台とする「昔話」として語られる一方で、特定の湖沼や海浜や山と結びついた「伝説」としても語りつがれてきた。近江国余呉湖を舞台とする『袖中抄(しゅうちゅうしょう)』(1186年頃)所収の「余呉の海」をはじめ、古典資料における類話は伝説であるが、いずれも天女の昇天をもって話は結ばれ、夫の天上界への到達や天女の親による難題のモチーフは見られない。

それでも本話は、江戸期の終わり頃までにはこれらのモチーフを含む「昔話」としても語られるようになったと思われる。次に、江戸期における家族制度やジェンダー観が、本話にどのように反映しているのかを考えてみたい。

この点に関してまず思い浮かぶのは、武家社会における儒教的倫理道徳観に基づく「長幼の序」や「男尊女卑」の家族観およびジェンダー観である。「婦人はいまだ嫁せずして父に従

い、すでに嫁して夫に従い、夫死して子に従うべし」として、女性は生涯にわたって男の家族の言う通りに生きるよう説いた「三従の教え」は広く知られる。

そこから言えば、天上界に自分を追いかけてきた人間の夫に指示を出し、魔法の力を発揮して父親が出す難題を次々と解決していく主体的で能動的な妻の天女とそれに従う夫は、現実の社会とは反対のイメージ(倒像)を描いていると見なすことができるかもしれない。

但し、民俗学や近年の近世史研究が明らかにしたように、武家社会はいざ知らず、町人や農民たちの社会においては女性、特に家庭における主婦の地位は相対的に高く、「夫を尻に敷く妻」や「カカア天下」の姿は決して例外ではなかった。下町の長屋を舞台にする落語のネタにもよく登場するところだ。そうして見れば、「天人女房」の天女夫婦は現実社会をそのまま反映したイメージ(正像)と言えるだろう。

「次男以下」と「婿入り」

もうひとつ考慮すべきは、長子相続制度に伴う、次男以下の立場の低さである。次男以下は家督を相続できず、彼らにも田畑を分配しようとする「たわけ(田分け)者」として嘲笑された。そのため彼らの取り得る選択肢は「分家」か「婿入り」か「独身のまま」か、であった。

3つの立場を反映する昔話を思い起こしてみよう。まず「分家」について、日本の昔話では思いつかないが、韓国や中国には「兄弟葛藤譚」と呼ばれる「金持ちでいじわるな兄夫婦」と「貧乏で善良な弟夫婦」の話がたくさんある。日本の「花咲爺」や「腰折れ雀」の韓国版・中国版がこれにあたる。日本の場合には中世以降、兄弟葛藤譚から隣人葛藤譚(「隣の爺」話)への転換が行われた可能性が指摘されているが、もしかしたら日本にもかつて、枯れ木に花を咲

かせる正直者の弟と、真似をして失敗を重ねる欲張り者の兄の話があったのかもしれない。

次に「婿入り」の話には、本話「天人女房」の他に、「一寸法師」や、殿様や長者が難題を解いた者を自分の娘の婿にするとお触れを出し、貧しいが才覚のある若者が難題を解いて婿入りする「難題婿」の話型群がある。

そして年頃をすぎても「独身のまま」だった男の話としては、「食わず女房」が思い浮かぶ。本連載第1回でも触れたように、飯を食わない女房がほしいと公言する主人公は、おそらく財産を相続されなかった次男以下の独身男であろう。ケチであることが強調されるが、そうせざるを得なかったとも言える。別の例では「炭焼長者」がある。彼も偶然、押しかけ妻によって家の周りに金が埋まっていることを知らされて長者になるが、それまでは極貧の生活を余儀なくされていた独身男だった。

女性の語り手の想い

そろそろ結論に移りたい。民間説話(昔話・伝説・世間話などの総称)には、必ず語り手の想い(メッセージ)が込められているはずで、それは時代や社会を反映していることは間違いない。前述したように、反映の仕方には、時代や社会の有りようをそのままに正像として描く場合と、これを逆転させて倒像として描く場合があり、前者がしばしば時代や社会に対する批判や風刺の精神と結びつくのに対して、後者においては、現実世界では叶えられそうにない夢や願望を描くことでカタルシス(昇華)の心理的効果を生むものと言えるだろう。

さて、ジェンダー論の視点ということ言うなら、語り手が女性であるか男性であるかを考えることも重要である。女性が「天人女房」を語る時、夫となる人間の男の、羽衣を隠して天女を自分の許に置いておこうとする身勝手さ、

自己中心性が、まずは強調されるかもしれない。自分の意思に反する結婚を強要された語り手自身の心境を投影させることもあったろう。したがって、元いた世界へ連れ戻してくれる「羽衣」という呪宝は、女性の語り手たちにとってまさに「魔法の羽根」だったはずだ。

子どもを残して一人天上界へ還る類話もあるが、それを「薄情な母親」と見なすか、それとも「女性の本音」と見なすかは意見が分かるところだろう。おそらく、子どものことは心配でならない、けれど元の世界へ戻りたい、と揺れ動く心が語り手たちの本音ではなかったか。

次に、夫が自分の言うままに動いてくれ、父親が夫に出した難題を自分が解決してやる場面を語る時、語り手たちは前述した「カタルシス」を体感できたに相違ない。

そして、1年に1日だけしか夫と会えなくなるという結末は、子どもや未婚の若者にとっては不幸な話と受け取られるかもしれないが、「いつかあなたたちにも、(この結末も悪くない)と思える日が来るかもしれないよ」と、女性の語り手たちは秘かに微笑んでいるかもしれない。

男性の語り手の想い

それでは語り手が男性の場合、この話のどこにポイントを置くかを考えてみると、まずは美しい女性の裸を覗き見したい、その女性を自分のものにしたいという男性心理であろう。ただし、酒宴の席での語りならいざ知らず、聞き手が子どもである場合にはそうした「色気」は抑制して語られたに違いない。

また、別れた妻に未練を残し、彼女の言いなりになる夫の姿には、男性語り手の多くが「その通り！」と心の内で叫んでいたのではないか。否、これは筆者の独り言である。そして結末に関しては「これも悪くない」、やはり独り言である。さて、読者の皆さんはいかがでしょうか？